

## 適切に表現する力の高まりを求める国語科学習

——書くことを通して育む言語能力の高まり——

加藤 大志

### 一 はじめに

新世紀を迎えた今、情報化社会は益々勢いをつけて波及しているといえる。そんな中、インターネットの普及に伴い、「書く」という言語活動が見直されつつある。文字言語によるコミュニケーション媒体の発達がその要因であると考えられる。個人でホームページを作成するために文字を使い、Eメールをはじめとする文字による通信を行うために文字言語を駆使する。ただ、これらの場合、文章を書くというよりは、文章を作るという方が当てはまるかもしれない。書くという作業には、文章を作る以上の過程があるように思われるからである。

例えば、今この文章をパソコンを使い活字として画面上に表示しているが、言葉が適切でない場合、いとも簡単に消去し、添削することができ。しかし、原稿用紙に筆記具を用いて書く場合は、こ

れほどたやすく推敲し、完成させることはできない。文字言語を使って自分の考えや思いを第三者に伝えようとする時に、ワードプロセッサによる作業は明らかに便利さと効率さをもたらした。それ故に、何か大切なものを阻害してしまうおそれがあるのではなからうか。

時節柄、机上には今年届いた賀状があるが、パソコンを使ったきれいな葉書が多いのに気づく。かくいう私もパソコンで写真を取り込んだ賀状を作成したわけだが、活字で「今年もよろしくお願います」と書いてあるのに、つい肉筆で「今年もよろしくお願います」と書き込んでしまう。印刷による字だけでは、気持ちが通じない気がするからである。

印刷による賀状は、手書きで書き上げるよりもずっと短時間には、しかも大量に作成することができる。反面、画一的であり、効率的であるが故に、手間暇をかけるのを惜しんだような気がしてしまう。

肉筆で書けばこそ、字に心が通うのではなからうか。近年の文字言語を使った意思伝達の需要は、このような心を置き忘れていように感じてしまう。

さて、生徒は、日常のコミュニケーションの手段として多くの場合「話す」という音声言語活動でまかない、文字言語活動の占める割合は少ないといえる。そればかりか、書くことが苦手ととらえている生徒が多数をしめる実態がある。一年生のある教室で書くことについてのアンケートをとってみると、37人中、書くことに対して苦手意識をもっている生徒が31人と大多数を占めた。また、古来より意志伝達の手段として確立している手紙についても、その正式な書き方が存在することさえ知らない生徒が多い。もちろん、会話による意思伝達を否定するわけではないが、音声言語と文字言語共に適切に扱える言語能力を育む必要性は言うまでもないことである。音声言語、文字言語には、それぞれの特性があり、よさがある。簡単にまとめてみると次のようになるのではないだろうか。

#### 【音声言語】

- ・間髪を入れず意思伝達ができる
- ・相手と対面することで随時自分の伝達内容を修正することができる

・言葉に抑揚をつけることで感情を伝えることができる

#### 【文字言語】

- ・相手との直接対話ではなく、言葉が残るので伝達する前に推敲することができる
- ・言葉や文章を推敲していく過程で考えをより深めたり、広げたりすることができる

生徒には、それぞれの特性を知り、確かな言語能力を育んでもらいたいものである。人が人として生きていくためには、言葉が必須であり、健全な社会生活を送るためには、周囲との円滑な意志疎通が重要となる。そして、意志疎通の要は言葉である。言葉を扱う教科として、生徒がより高い言語能力を獲得できる課程を考えねばならない。と同時に言葉には必ず心が存在することも忘れてはならない。言葉巧みな文章よりも、稚拙でも心が通う、そんな文章が綴れる人間に私自身もなりたいと生徒と共に日々精進している。

#### 二 主題設定の理由

本校国語科は今年度の研究テーマを標記のような「適切に表現する力の高まりを求める国語科学習」とした。新指導要領で述べられている「伝え合う力」を考えた時、その根幹をなすのは、言語能力

であり、言語能力を高めるためには、生徒一人一人が自らの表現意欲の高まりを求める必要があるととらえたからである。そこでこの国語科研究テーマを踏まえ、私は個人の研究テーマを、「——書くことを通して育む言語能力の高まり——」とした。言語能力の内、特に生徒が苦手ととらえる「書く」活動を中心に実践を試みたかったからである。書くことを通して繰り返し言葉を吟味し、相手意識を明確にもって文章を綴ることができる言語能力を育成したいと考える。

### 三 願う生徒の姿

- ・文章を書くことについて抵抗感をもたない生徒
- ・伝えたい内容を的確に相手に伝えるために言葉や文章を吟味することができる生徒

文章を書くと聞いただけで、抵抗感をもつ生徒がいる。多くの場合その理由をはっきりとさせることは難しい。「書くのは面倒だ」「なんとなく苦手」そんな答えさえある。そこで、「文章を書くことは苦手だけれど、書くことに抵抗感はない。」と言える生徒の育成をまずは目指したい。その上で、文章を書いた時に、相手意識と目的

意識を認識し、自分なりによりよい文章をめざそうと推敲できる生徒の育成を期する。推敲する力は、文字言語の特性を活用し、高い言語能力を追求することになると考えるからである。

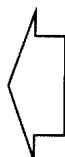
### 四 研究の仮説

#### 【本校国語科の研究仮説】

- (1) 表現する喜びを実感する学習活動計画のあり方
  - (2) 主体的に表現し合う学習集団の育成
  - (3) 適切に表現する力を高める学習活動の創造
- 右の三点を追求していけば、適切に表現する力を高めていこうとする生徒が育つと考える。

#### 【研究仮説】

- (A) 書きたいという意欲を促すテーマの設定
  - (B) 書く手順を形式化し、書く場を繰り返し設定
  - (C) 学習集団内で互いに推敲し合う場を設定
- 右の三点を設定し、追求することで、書くことを通して言語能力の一端を高めていくことができると考える。



この仮説を踏まえながら

(A) 「書きたいという意欲を促すテーマの設定」について

学習に向かう姿勢や意欲を高めることは、学習そのものの充実につながる。適切に表現する力を高めようとした時に、表現しようとする意欲を促すことは、重要となる。生徒の中には、書きたくないのに書かなければならないことから生じた書くことに対しての抵抗感があるように感じる。例えば、読書感想文。単に「読書感想文を書こう」という課題を設定し、学習活動に入ろうとすると、多数の生徒が抵抗感を示す。書く必然を感じないからであろう。そこで、生徒が「これなら書いてみようかな。」もしくは、「これなら書けそうだ。」と思うようなテーマを設定することで、書くことに対する抵抗感を軽減できるのではと考えた。また、書く目的をはっきりとさせ、そのためにこれを書くのだという必然性があるテーマを設定することで生徒の抵抗感の緩和をはかれると考えた。

(B) 「書く手順を形式化し書く場を繰り返し設定」について

単に一つのテーマにそって何かを書くという時に、その活動には、一つの過程があると考える。その過程を端的にまとめてみると、

① テーマについての自分の考えをもつ。

② 自分の主張や伝えたいことを明確にする。

③ 構成メモをつくる。

④ 構成メモに従い文章化する。

⑤ できあがった文章を推敲し、清書する。

以上である。もちろん、人それぞれに書き方はあるであろうが。生徒の意識の中に、書くテーマを理解しても、そこからすぐに書き出すことは難しいと捉えている感がある。前述のアンケートの中で、書くことが苦手な生徒に対し、何が難しいのか問いかけたところ、「書き出すことが難しい」という答えが八割を占めた。(この中には、何を書いているのかわからないといった生徒も含む。)そこで、テーマを確認した後、すぐに書き出す前に、短文や箇条書きという形式を使った構成メモを作るという過程を踏むことで、書いていく見通しをもつと共に、書き出しに対する抵抗感をなくせると考えた。「長い文章は難しくても短文であるならば」という生徒の意識があるからである。そして、このような過程を繰り返すことで、徐々に生徒一人一人の中に自分の書く手順を作り上げ、文章を書くことに対する抵抗感を減らせるものと考えた。

(C) 「学習集団内で互いに推敲し合う場を設定」について

表現意欲の裏には、誰かに自分の主張を受け入れてもらいたいという意識があるはずである。それは、認められ励まされることで意欲を高めることにつながると言うこともできる。集団で学習する利

点の一つに互いに認め励まし合うことで切磋琢磨できるということがある。そこで、互いに互いの文章を推敲し合うことで、言語能力を磨くことはもちろん、仲間に自分の文章を見せることになるので、よりよい文章を書こうとする意欲につながるのではないかと考えた。

以上三点の仮説で共通することは、「書くことに対する抵抗感をなくす」ということである。この抵抗感があるために、苦手意識となり、言語能力の育成の妨げになるのではと思われる。そして、その克服のために重要なことは、「書くことに慣れる」ということではないであろうか。話すことには幼少時から慣れているのでなんの抵抗感もたない。(もちろん例外はある)書くことについても慣れてしまえば、抵抗感はなくなるはずである。そのためにも上記三点の仮説を繰り返すことが大切となる。その点をおまえ、できるだけ多く書く活動を学習活動に位置づけ、書く力の育成を図りたいと考えた。

## 五 研究の実践

### 実践① 仮説(A)にかかわった実践

スピーチを行うためのスピーチ原稿づくり

四月当初、まずは書くことの必然を設定する実践を試みた。単元の終末でスピーチを行うために、その原稿を書くという必然である。対象学年は二年生で、単元名は「新鮮な気持ちで」。単元指導計画を端的に示すと左記のようになる。

「新鮮な気持ちで」単元指導計画略案

【教材名】・・・遠くでっかい世界

【単元活動計画】

1. 導入教材との出会い 新出漢字の確認 黙読
2. 辞書を使っての語句の意味調べ 範読 音読
3. 内容理解 あらすじ確認
4. 内容理解 筆者の主張の確認
5. 表現の学習 自分の思いの文章化(大志について) 原稿書き
6. 表現の学習 自分の思いの音声化(大志について) スピーチ
7. 表現の学習 自分の思いの音声化 スピーチ まとめ

教材「遠くでっかい世界」という椎名誠氏のエッセイを学習した後、その内容にかかわらせたスピーチを行う単元とした。ここでは、自らの「大志」についてスピーチするという活動であった。生徒はそのために、活動計画の5で、スピーチ原稿を作る必然が生まれ、書く活動に入った。多くの生徒がスピーチをするという目的に向かっ

過程	学 習 活 動	指導・援助
S D I S D P	<p>○本時のねらい</p> <p>一 本時の学習活動のめあてをはっきりとさせ、学習の流れの見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教科係による五分間の学習活動</li> <li>・教科係による課題の提示と学習活動の流れの説明</li> </ul> <p>スピーチを行うためのスピーチ原稿を書こう</p> <p>○つきたい力の確認</p> <p>二 スピーチ原稿を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各自が自分のテーマをもち、ノートに原稿を書く</li> <li>・辞書を使いながら、適切な表記や言葉使いに気を配りながら書く</li> </ul> <p>三 隣同士で書き上げた原稿を見せ合い、感想を伝え合う。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>Aさんの原稿は伝えたいことがはっきりとしていて聞いている方もわかりやすいと思います。文末は敬体か常体のどちらかに統一した方が聞きやすいと思います。</p> </div> <p style="text-align: center;">⇕</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>Bさんの原稿ははじめに言いたいことをはっきりと言いつけている原稿なのでわかりやすく聞けると思います。誤字があるのでもう一度見直すとよいと思います。</p> </div> <p>四 意見交換をもとに自分の原稿を見直す</p> <p>五 本時の学習を振り返り、学習のまとめをする。</p> <p>○国語系の進行で本時の学習姿勢の振り返りや、つきたい力を意識して活動できたかを交流する。</p>	<p>○国語係が本時の課題と学習内容を伝えられるよう事前に係と打ち合わせる</p> <p>○机間指導の中でつきたい力を個々に確認し意識させる</p> <p>○自分の立場や伝えたい事柄がはっきりしているか確認し助言する</p> <p>○相手の原稿のよい点とアドバイスをする</p> <p>○机間指導の中でつきたい力を意識して推敲されているか確認する</p>

て書くことができた。なかなか書き出せない生徒もいたが、書く活動の先に話す活動があるので、「大志ということについて、何を話す?」と問いかけると、「自分の夢について話す。」と答え、そこから、「自動車整備士になる」という題で文章を書き始めることができた。

活動5のねらい及びつきたい力、展開は次の通りである。

○本時のねらい

○本時の展開

「大志」というテーマでスピーチするために、スピーチ原稿を書き上げる、ことができる。

○本時においてつきたい力

・自分の立場及び伝えたい内容を明確にする力

・伝えたいことが効果的に伝わるよう、語句を選んで用いる力

また、活動6においては下記ののような評価メモを作り、スピーチをするだけではなく、聞き方指導を兼ねた書く活動も位置づけた

二年三組	スピーチ評価メモ	氏名
( )	( )	( )
学習課題	( )さんのスピーチを聴いて	
相手を意識したスピーチができるようになろう		
そのためには・・・		
( )	( )	( )
( )	( )	( )
( )	( )	( )
( )	( )	( )

この実践において明確になったことは、

- ・活動の目的が書き上げることではなく、別の目的のために書くことで、書くことに対する抵抗感を幾分なりとも減らすことができ

た。

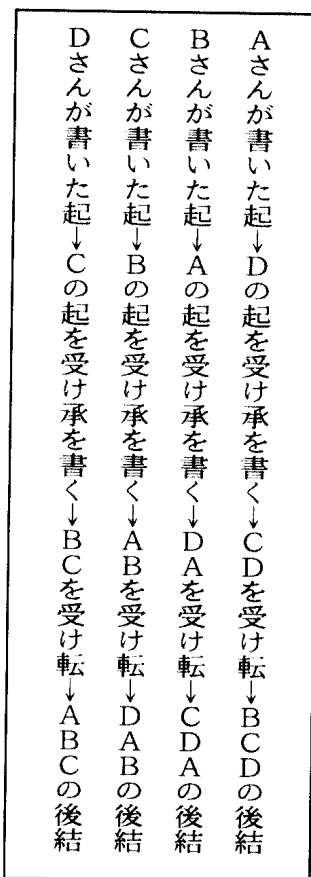
- ・話すという目的がはっきりとしているために、話す内容を考えることで、書き出す抵抗感が少なくなった。

・できあがった原稿を仲間と見合ったことで、よりよい文章にするための観点が具体的になった。

実践② 仮説(A)及び(C)についての実践

生活班で連作文を行う

「身近な事柄を題材とした文章を書き、表記や語句の用法、叙述の仕方などについて推敲することができる。」というねらいに向けて、連作文を行う活動を設定した。生活班を母体とし、各個が書いたものを回していき、前者の続きを書いていくというものである。起承転結の順に回す。



Aさんが書いた起を引き継ぎBさんは承を書く。CさんはAさんの書いた起にBさんが付け足した承を受け転を書く。DさんはAさん

の起、Bさんの承、Cさんの転と続いてきた文章の結を書く、というわけである。このように推敲をする文章を連作文で作り出す形式を設定した。仲間と共につくりだす物語の意外性に学習意欲の喚起を期待した。

今回の実践では、「推敲する」ことが学習の目的であり活動内容であった。連作文という形態をとったことで、作文が苦手な生徒にとっても確実に推敲をする学習材を確保することができた。また複数の生徒が文章を綴るので、推敲をする観点が多く含まれた文章になっている。生徒は楽しんで活動することができ、普段書くことが苦手な生徒も書くことができた。

#### Aさんの振り返り

僕は、書くことが苦手です。何を書いていいかわからなくて、なかなか書き出せません。いつもなら一行ぐらいしかかけないけど、今日はおもしろかった。B君の話の次だったけど、わけがわからなかったけど頑張って書いた。

このように、文末の敬体、常体の不一致が見られ文章を書くことが苦手な生徒も、書くことについての抵抗感は軽減できたようである。また、推敲をした文章を隣同士で確認し合った。誤字脱字の確認に始まって比喩のおもしろさに着目し、相手に感想を話す生徒もいた。

多くの生徒が推敲をし、よりよい文章を目指すことが必要であると実感することができた。

この実践において明確になったことは、

- ・生徒が興味ある題材であれば、さほど抵抗感をもたず書く活動に集中することができる。
- ・仲間と連歌のように文章を綴っていく活動は、生徒の興味を十分に喚起させる活動だといえる。
- ・仲間共に活動することで、書くことに苦手意識をもっている生徒にもよい刺激となり、活動に専念することができている。

#### 実践③ 仮説(A)と(C)の実践について

##### 写真をもとにした文章づくり

文章表現には、様々な形態があるが、ここでは写真を使い、写真に込められた思いやエピソードを文章で添える活動を設定した。自分が写っている写真には、なにかしらの思い出がある。その写真にまつわるエピソードや、その写真に写っている自分の思い等を文章化することで、書く材料を選材する時、写真そのものが題材となり、生徒が何を書けばいいのか理解しやすいと考えたからである。そし



てこの活動を軸とした単元を構築した。

【対象学年】 一年生

【活動時間】 390分（50分一単位の授業とした場合、七時間程度）

【単元のねらい】

- ・生活の中で体験したことについて目的意識、相手意識を明確にもって文章を書くことができる。
- ・文章を書いていく手順を学び、意欲的に表現していくことができる。

【単元でつける力】

- ・相手や目的に応じて伝えたい内容を明確にする力
- ・相手意識、目的意識を明確にして書く材料を選ぶ力
- ・表記や語句の用法、叙述の仕方などについて推敲する力

【仮説との対応】

仮説(A)について

- ・写真を文章化するという日常生活では体験しない活動を設定することで生徒の興味関心を喚起することができるのではない

いか。

- ・写真を自分で用意することで、この写真を説明しようという意欲を喚起させ、生徒一人一人が話題を自分で選択することで、自主性をもった学習活動となるのではないか。

- ・写真を紹介するという伝える目的をはっきりとさせることで、書く意欲を喚起することになるのではないか。

仮説(B)について

- ・長い文章を直接書き始めるのではなく、書く過程を設定することで、文章を作り上げる見通しをたて、学習に励むことができるのではないか。

- ・書く過程に費やす時間を生徒一人一人が設定することで、個にあった活動ができるのではないか。

仮説(C)について

- ・文章を完成させる前に、仲間同士で推敲し合い、指摘し合うことでよりよい文章を作り上げようとする意欲が生まれるのではないか。

- ・単元の終末にできあがった文章を学級で読み合う活動を設定することで仲間自分の思いを伝えるという相手意識と目的

意識を意識させることができるのではないか。

特に本単元では導入の工夫を行った。導入で生徒一人一人に書くという意欲をもたせることが、一番大きな学習効果になると考えたからである。以下、導入時の概説及び授業計画である。

本時は、書くための意欲づけと共に、生徒自らが自分の課題を明確にし単元学習の活動計画を立てる時間である。

生徒の中には、「書く」ことに対して、消極的な姿勢をもっている者もある。その背景には、「何を書いてよいかわからない」といった理由が見られる。そこで、ここでは、書くという意欲をもたせるために、書く目的と書く内容を生徒が具体的に理解できる導入を設定した。まず、何を書けばいいのかをはっきりとさせるために、サンプルの文章について話し合う活動を行う。そこでどうい文章を書けばいいのかを具体的にイメージさせる。次に、活動計画を立てる前に一度一人一人が文章を書き、その中から自分の課題を探し出すようにした。自分の課題を見つけることがここの書く目的となり、表現する必然性が生まれると考える。また、書き始めることの個人差を考慮し、題材の絵のみがあるワークシート、絵とその絵に関するエピソード的な絵があるワークシート、エピソードがす

に文章になっており、構成を考えるワークシート等というように書き出す前のいくつかの段階別にシートを準備し、自由に選んで活動できるようにした。「これなら書けそうだ」という意識をもたせ、学習の意欲化を図りたい。そして、この活動で、全員の生徒に書いた喜びを味わいながら自分の書くことについての課題を具体的にたせたい。

生徒同士の学び合いの場として、同じ課題をもつ生徒同士で意見交流ができるように、誰がどのシートを使っているかをネームプレートの使用で分かるようにした。

後半では、単元学習活動計画を立てる。ここでは一人一人が活動の見通しをもち、自分の必要に応じて決められた時間を配分する。自分の課題をもとに予習活動計画を立てることで生徒の自主的な学習が成立すると考える。課題を達成するために同じ課題をもった仲間との意見交流を行いながら、具体的な学習活動計画を立てさせていきたいと考えている。

この実践では、生徒に「書く」ための意欲をどうもたせるかが課題であった。そこで写真に込められた思いやエピソードを文章で添える活動を設定した。反省点として、意欲とは別に生徒に書く目的を明確にもたせることができなかったことがあげられる。学級で読み

合うだけでは、生徒の目的意欲を喚起しきれなかったことが要因であると考ええる。誰に何を伝えたいかがはっきりとできなかったために、単元の見通しが具体的にならなかつた。また、ワークシートを使って、生徒の意欲化をねらったが、ワークシートが適切でなかったことも反省点の一つとなった。準備したシートが生徒のニーズに合っていたといいきれない。そこには、生徒が短い時間の中でどのシートを使えばいいのか選択できなかったこと、そして、シートの内容が吟味しきれなかつたことが要因として挙げられる。シートの内容を研究することが大きな課題となった。その他にも活動計画を立てる前に一度一人一人が文章を書き、その中から自分の課題を探し出すように仕組んだが、文章を書くことが苦手な生徒に自分の課題を考えさせる点に学習活動の苦しさがあることがわかつた。確かに課題を明確にできない生徒にその課題克服の学習計画をイメージさせることは容易ではなく、検討しなおさねばならない事項であるといえる。また、書くことを苦手とするある生徒は、ワークシートを使いながらもなかなか書き出すことができず、結局二行書いただけに終わってしまった。ワークシートの有効性の問題は別に考えるとしても、二行書いただけの生徒に本時の学習活動が成立していなかったことは疑う余地もなく、個別に指導してはいたのだが、時間的な限界があり、成果を導き出すことができなかった。

## 六 実践を終えて

文章を書くことが苦手だと意識する生徒に、どうにかして「よし、書いてみよう。」という意識をもたせることをねらってきた。実践を通して明確になったことは、書く力をつけるためには、書こうとする意欲をもつことが大切であり、教師は意欲化をはかるための工夫が必要だということである。それは、生徒の姿が証明してくれた。普段なら挙手も少なく、ノートまとめの時間になかなか活動できなかった生徒も、書く目的を明確にすることや、意欲化をはかる工夫をすることで、実際に楽しんで書く姿が多くみられた。また、実践③においては、生徒の中に学習活動を自分たちで計画し、課題を克服していかうとする意識をもたせることができた。

### 【成果】

- ・書くことに対し前向きに活動できる生徒が多くなった。
- ・書き上げたものを推敲しよりよい文章にしようとする意識が定着してきた。
- ・辞書を使いながら、言葉の使い方留意して文章を書くことができるようになった。

文章というものは、人それぞれの人となりが反映されるといわれる。今回の実践を通して深く考えさせられたことは、「どのような文章がよい文章といえるのか。」ということであった。例えば、言葉た

らずでも言わんとしていることがとてもよく伝わる文章もあった。実践③でできあがった生徒の文章の中には、誤字脱字もなく文のねじれもない、すらすらと読める文章であるのだが、何か心が伝わってこない、味気ない文章ということがあった。読みやすい文章と心をうたれる文章は別であると言えるのかもしれない。表記的な事項を生徒に指導すれば、生徒達は学習し、獲得していく。しかし、そのような学習活動であると、生徒の興味関心は高まらないことが多い。心を伝えることに方法論はあるのであろうかと思った。

#### 【課題】

・書き上げた文章の評価観点を整理する必要がある。書く活動を通してつける力は系統的に整理したが、実際の文章で、学年別の到達課題を今後整理する必要がある。

・仮説(B)における書く手順の見直しが必要である。書き方を画一的にすると、生徒の自由な発想を妨げるおそれがあるからである。

書くことについての基礎・基本を考えた時、原稿用紙の使い方をはじめ、接続詞の正しい使い方、誤字脱字の確認を含めた推敲の仕方等は、生徒に学ばせたいことである。今回は、説明的文章ではなく、自由な発想で書くことのできる文種であったが、論文や説明文を書くこととすれば、この基礎・基本は大切になってくる。このような文

種を扱う学習活動で、いかに生徒の書く意欲を喚起させるかが、次の課題となった。

## 「実践研究記録」を読んで

高橋 弘

### 一

本学に国語国文学会が結成されたのは昭和五十六年十月、その会誌『国語国文学』の創刊号が出されたのが、昭和五十七年三月のことであった。以後毎年一回ずつ『国語国文学』は刊行され、今回は第二十一号になる。年数から見れば、成人式を済ませ大人の仲間入りをした会誌ということになる。

本学が最初の卒業生を送り出したのは昭和五十一年三月。この間、国語を専攻・専修して卒業していった人は、本年度の卒業生を含めて千七百名余り。現在も全国各地の学校現場で活躍しているかつての本学国語国文学会員の人は、相当な数にのぼるのではないかと